

戦時下の漫画

- 新体制期以降の漫画と漫画家団体 -

井上 祐子

はじめに

戦時下の大人向けの漫画に対しては、擁護と批判という対立する二つの見解がある。漫画の通史または漫画家の個人史¹⁾においては、戦時期についての言及は多くはないが、総じて言えば、「漫画が描きたいという願望を利用して、戦争を鼓吹する漫画を描かされた」²⁾として漫画家を擁護する傾向がある。他方、石子順造は、戦後の政治漫画におけるアクチュアリティの喪失の根底には、戦時下の漫画家の主体性と方法論の欠如があるとして、戦時下の漫画、中でも後述の雑誌『漫画』とその編集責任者であった漫画家近藤日出造を厳しく批判した（『戦中マンガの精神構造』『現代マンガの思想』太平出版社 1970年）。梶井純の『執れ、鷹懲の銃とペン 戦時下マンガ史ノート』（ワイズ出版 1999年）は、この石子順造の見解を踏襲しながら、さらに研究対象を広げ、各漫画家の思想性及びその欠如を問題の中心において、漫画家の戦争責任の追及を図ったものである³⁾。

以上のように従来の研究は、擁護するにしろ、批判するにしろ、漫画家個人の所業と思想性及びその欠如を問題の中心に据えてきたが、近年では、岡本玲が、漫画の図像そのものを分析するという新しい研究に取り組んでいる⁴⁾。しかし、現在までの研究では、石子順が漫画家を追い込んだ政府・軍部の責任を追及すべきことを指摘している⁵⁾ものの、戦時下の漫画・漫画家と国家の関わりについては必ずしも明らかになってはいない。

漫画も他の文化・芸術領域と同様に、戦時下においては国家によって国策宣

伝に利用されたのであり、戦時下の漫画・漫画家について考える場合、国家諸機関との関わりを抜きにすることはできない。また、これも他の文化・芸術領域と同様であるが、国家諸機関との関わりの中で、漫画界でも一元化団体の結成が試みられる。その最初の足掛かりとなったものが、1940年8月に結成された新日本漫画家協会であり、同協会の機関誌として発刊されたのが『漫画』⁶⁾である。同協会は、1943年5月に日本漫画奉公会が結成されたのを受けて翌6月に解散するが、『漫画』は、それ以前に同協会の機関誌ではなくなっているものの敗戦直前まで発行され、さらに戦後復刊される。

小論では、この『漫画』及び内閣情報部次いで情報局によって刊行された『写真週報』の漫画欄⁷⁾に掲載された漫画と漫画家小川武の戦時下の漫画家団体に関する記録ノート及びスクラップブック⁸⁾を主要資料とし、新体制期から敗戦までの漫画家及び漫画家団体の活動を追いながら、国家諸機関との関わりの中で、漫画に課された役割を検証し、国策宣伝に取り込まれる過程で漫画がどのように変容していったのかを明らかにしていきたい。

論考を進めるにあたっては、新日本漫画家協会結成から太平洋戦争開戦までの第1期(1940年8月～1941年11月)、太平洋戦争開戦から日本漫画奉公会結成までの第2期(1941年12月～1943年4月)、日本漫画奉公会結成から敗戦までの第3期(1943年5月～1945年8月)に分けて考察する。

漫画の二つの型

戦時下の大人向けの漫画には、大別して二つの系譜が流れている⁹⁾と思われる。一方は、政治・政治家及び社会・社会体制に対する批判や風刺を主眼とした政治・社会漫画であり、他方は、笑いを主眼としたナンセンス漫画である。

政治・社会漫画では、現実の様々な問題に対し、漫画家各人がそれぞれの主張・見解を基に批判・批評すること及び敵対するものを攻撃することが重視された¹⁰⁾。柳瀬正夢・麻生豊・穴戸左行・下川凹天等は、新聞雑誌の「売品主義

の俗悪なる漫画」を批判し、民衆を啓蒙・鼓舞する漫画芸術の確立を目指して¹¹⁾、1926年8月に日本漫画家聯盟（以下「漫聯」と略記）を結成する。片寄みつぐは、漫聯以前の漫画家は、教養・写実力は豊かだが、前近代的で画家と未分化であったのに対し、漫聯によった漫画家たちは、イデオロギー的には左翼、形式的には近代的なジャーナリズムに適応する実用的スタイルを用い、ナンセンス漫画への橋渡しの存在であったと評している¹²⁾。確かに、漫聯以前の漫画が、筆の線の幅や濃淡で描く絵画的で写実的な漫画であり、説明的であるのに対し、漫聯の機関誌『ユウモア』には、ペン描きのモダンなものが多く、階級や風俗を代表する人間が特徴的に描かれ、階級間の対立が端的に表現されている。しかし、漫聯の活動は、プロレタリア芸術運動に吸収され、二年程で幕を降ろすことになる。

一方、ナンセンス漫画は、漫聯に参加した漫画家たちよりも下の世代の若い漫画家たちによって確立されていく。その中核になったのが、近藤日出造・横山隆一率いる新漫画派集団（1932年6月結成、以下「集団」と略記）であるが、彼らは仕事のシステム化と漫画のパターン化によって、主に『アサヒグラフ』や『新青年』等の新しい型の情報娯楽雑誌を中心に地歩を固めていく。集団の活動に影響されて、三光漫画スタジオ¹³⁾や新鋭マンガグループ¹⁴⁾等が結成された。ナンセンス漫画は、当時、左翼的な立場にあった加藤悦郎や松山文雄等からは痛烈に批判された¹⁵⁾が、戦後は、欧米の影響を受けた新感覚と躍動感に溢れた、笑いを主眼とした漫画¹⁶⁾であり、人間性を風刺することを主目的とした漫画¹⁷⁾であったと評価されている。ナンセンス漫画とは、政治・社会漫画とは異なる観点から事象を把握し、政治・社会よりもその中の人間を見る漫画であり、現実そのものを描くより現実から離れることで逆に真実を言いあてるような漫画であったと言える。

日中全面戦争が始まると、政治・社会漫画、ナンセンス漫画双方共低調となるが、新体制期以降、国策宣伝に漫画が取り込まれるようになると、左翼的な立場を貫く一部の漫画家を除いて、それぞれの系譜に属する漫画家たちは、対

立をはらみながらも相まって戦争に協力していくことになる。

新日本漫画家協会の結成と時局漫画の模索 (1940年8月～1941年11月)

1 新日本漫画家協会の結成と対立

1940年に入ると、『写真週報』や『国民精神総動員』等国家機関の発刊する新聞雑誌に漫画が掲載されるなど、国策宣伝に漫画が取り込まれるようになる。8月30日には国民精神総動員中央本部が漫画家との懇談会を開催し、「大衆的魅力」を有する漫画を通しての精動運動への協力を要望する¹⁸⁾。新日本漫画家協会(以下「協会」と略記)は、この懇談会の翌日に結成される。精動本部は、また、協会の機関誌『漫画』の発行にも協力したという¹⁹⁾。漫画家の側にも、漫画市場の縮小や生活の問題²⁰⁾、また、内容的な行き詰まりがあり、新体制の掛け声の下、漫画家側の内発的契機と精動本部の意向が相まって、協会の結成に至ったものと思われる。協会もまた、他の文化・芸術領域の一元化団体同様、官民協力の下に生れた国策協力団体であったといえよう。

「日本新体制建設運動の文化的協力者たり得る新時代的漫画家」への達成を目標とする諸研究を第一義とする²¹⁾ことをうたった協会には、ナンセンス漫画の中核であった集団からナンセンス漫画批判の急先峰であった加藤悦郎まで、中堅・若手60名余りが相よった²²⁾。発足当初は研究会や展覧会も開催されたが、活動の中心は『漫画』(図1)の編集であった。創刊当初は、加藤悦郎の「お荷物はお断り」(8巻9号 1940年11月号、以下8-9 40.11と略記)や「傍観者 これが日本人の態度か」(8-10 40.12 図2)、岸丈夫の「新体制を蝕むもの」(8-10 40.12)等、新体制に協力しない国内の敵を批判する漫画が目立つ。しかし、実質的な編集責任者であった近藤日出造や「生活世相漫画」を重視していた富田英三は、これらの漫画を政治宣伝的でポスター的な漫画であって、漫画の本質からは外れたものだとして批判した²³⁾。集団のメンバーにも、

このような漫画を描くものもあり、この対立は単純に政治・社会漫画とナンセンス漫画の対立とは言えないが、それを基にする漫画観の対立は根強かったようである。

以上のような対立が続く中、協会は大政翼賛会宣伝部と結んで「翼賛一家大和家」という漫画キャラクターを考案する。これは11人家族の大和家と大和家の属する隣組を素材にして、翼賛運動を日常生活にひきつけ、笑いの中で普及しようという試みであった。「大和家」はレコードや紙芝居にも応用され、宣伝部での評価は高かった²⁴⁾が、教化・教訓的に過ぎ、あるべき庶民像の普及には役に立ったかもしれないが、漫画としては面白くない。このような漫画が評価されたことへの反感もあったのであろうが、加藤グループ(加藤・岸・安本亮一・深谷亮)は早くも1940年12月に協会を脱退する。

『漫画』以外の研究・企画が不振なこともあって、協会の当初の目的であった研究は進まなかった。このために、漫画観をめぐる対立がくすぶり、協会では“新体制下のあるべき漫画”についてのコンセンサスをつくることができなかった。さらに『漫画』編集の中心であった集団への他の会員の反感も強かったようであり²⁵⁾、内部対立と『漫画』以外の活動の不振は悪循環となっていったようである。

2 漫画の多様性と当局の介入

上述のように、第1期においては、“あるべき漫画”についてのコンセンサスが得られなかったため、『漫画』には様々な傾向の漫画が混在した。「大和家」のような国策を普及し、奨励するものが基調にはあるのだが、一方で国策をモチーフとするものの、その国策を取り違えたり、行き過ぎたりする人間を笑うもの、人間の欲や浅ましさを笑うもの等も少なくない。永井保の「廃品活用運動」(8-10 40.12)は、「捨てる前の一工夫」と書いた籠を背負った屑屋がゴミ置場を見て「俺らの宣伝がゆきとどいたせいかめっきり廃品がなくなったへへ」と言う漫画であり、塩田英二郎の「簡単服」(9-8 41.8 図3)は、ところどこ

ろに継ぎのあたってボロボロの服を着た、いかにも厚かましそうな大柄の中年の妻に向かって、小柄で貧相な夫が「おやお前今日はまた、たいした恰好したもんだね」というのに対し、妻が「簡素の中の美しさ」と言い返すものである。これらの漫画は、国策を正面から批判するものではないが、国策にかこつけて常識を逸脱している人間を笑うことで、遠回しながらも国策を揶揄する側面を持つと思われる。他に、国民服を着て威厳を装おうとする男性を描いたもの²⁶⁾や下戸が配給のビールをもたないといって飲んで酔いつぶれる漫画²⁷⁾等もこの系列に入るであろう。

また、行列を横目に裏でものを売買するお得意と商店主を描いた利根義夫の「お得意さんは勝手口から」(9-8 41.8)や誰もいない舞台上で漫才をしている寄席を描いたをぎ原賢次の「行き過ぎた健全娯楽」(9-9 41.9)等は、かなりストレートに国策の無理・矛盾を衝いていると思われる。一方、国策に全く関係のない漫画も見受けられる²⁸⁾。

以上のように1941年夏頃までは様々なテーマの漫画が描かれた。絵には巧拙があり、すべてがうまいわけではないが、漫画として面白いと思えるものも散見できる。しかし、大政翼賛会宣伝部によって協会機関誌から大政翼賛会宣伝部推薦という肩書に変えられる9巻7号(41.7)あたりから当局の介入も次第に強まりだす²⁹⁾。

当局の『漫画』に対する意見については、小川の記録ノート『新日本漫画家協会記録』に収められた『漫画』の編集会議(1941.8.30)及び秋季大会(1941.9.30)での報告しか資料がないため、詳しいことはわからない。また、これらの報告においては、どの漫画に対する意見なのかが不明であり、おそらく上述のような国策を揶揄するような側面をもつものへの批判ではないかと思われるが、断定は出来ない。しかし、これらの報告からすると、警視庁・翼賛会宣伝部・情報局は総じて、『漫画』を“拙い”“安価な国策便乗”と見ており、何らかの改善が必要だと考えていたようである。

それに対して協会側でも、対処の仕方が協議された。秋季大会の報告には、

「協会の『漫画』を当局及推進方面からもっと国家的に強力なものにしたらと云ふ要望」があって、「内容も時局（政治）漫画に重点をおくことにしたので、「今後は作品も厳選主義でやりたいから会員各位一層の精進をお願い致します」とある³⁰⁾。秋季大会では、この時局（政治）漫画を多くするという意見に対し、ルーズベルト・チャーチルでは具体性が出ないのではないが、あるいは時局というのを広義に考えて日常生活の時局性を反映するようなものを入れるべきではないかとの意見が出された。結局、秋季大会においては時局漫画に対する見解は一致せず、時局漫画の定義についてはあいまいなままであった。しかし、一方で、時局漫画の方向性は既に打ち出されていた。9巻9号（41.9）の巻頭言には、「国内に於てむけられるべきポイントは悪ではなく、建設的な厚生的な絶対的な戦争理念による輝かしい明るい面であり、また「敵性国家の弱点ばかり」を照準とせず、「わが国の理想」を描くべきだと書かれている。上述のように、国内の敵を攻撃する漫画よりも、「大和家」のように戦争に仲よく協力する国民を描く漫画の方が、「一億一心一体」を建前とする当局の意には適っていたのであり、この巻頭言は、近藤日出造が当局の意向を汲んで書いたものと思われる。しかし、敵への攻撃は、政治風刺漫画の最も重要なモチーフであり、敵への攻撃を否定することは、政治漫画を大きく制約することであって、政治漫画に重点をおくという方針とは矛盾する。太平洋戦争の開戦に伴い、海外の敵に対してはこの方針は転換され、米英を嘲笑する漫画が溢れることになるが、国内の敵を批判する漫画は、戦争末期まで描かれなかった。国内の敵への批判を描けなかったため、政治漫画はその本領を發揮する余地を狭められ、ナンセンス漫画の後塵を拝することとなった。

一方『写真週報』は、1940年1月から漫画を掲載するようになったが、第1期においては、素人の投稿漫画を掲載することを主眼にしていた³¹⁾。テーマとしては、大半が物資節約・貯金・代用品使用等の国策の奨励であった。稀に面白いものもあるが、全体的としてはアイデアが貧困で、絵も稚拙なものが多く、見るべきものはほとんどない。

3 敵及び国際情勢を描いた漫画

漫画は、当時の視覚メディアの中で最も頻繁に敵を描いたメディアであり、一般大衆の抱く敵及び国際情勢の具体的イメージの形成に影響したところも大きいと思われる。

『漫画』においても第1期から敵及び国際情勢を描いた漫画があるが、これらは漫画というよりも、日本側の解釈する敵及び国際情勢の絵解き、わかりやすい図解というようなものである。日米開戦を控えたこの時期に最も頻繁に描かれたのは、ルーズベルトであり、蒋介石、チャーチルと続く。テーマとしては、これら三者の困惑・狼狽振りを描いたもの、つまり自由主義的な米国民の士気の低さに悩み、世界各地の様々な問題に困惑するルーズベルトや日本の攻撃に負け続ける蒋介石を笑うもの³²⁾が最も多く、他に米の非現実性・非科学性を笑うもの³³⁾、ソ連に操られるあるいはソ連と手を結ぼうとする米英の愚かさ³⁴⁾、米英の弱小国犠牲を批判するもの³⁵⁾等がある。

太平洋戦争が勃発するまでに、日本がアメリカに対しどのようなイメージを抱いていたかについては、いくつかの研究がある³⁶⁾。これらの研究によれば、1930年代には「宿命的な弱点を内にはらんだ病めるアメリカ、巨大だが脆い国、広大だがふがない国というイメージ」³⁷⁾が浸透し、さらに、太平洋戦争直前には、各新聞が「物質的な戦争準備の進行と「精神的には全く脆弱な」矛盾が注目されると述べ、「ヤンキー恐るるに足りぬ」と書きたてた³⁸⁾という。これらのイメージは、マスメディアによって作り出されたものであるが、漫画家たちも新聞や雑誌、書籍などから得たこれらのイメージを視覚化していったものと思われる。

『漫画』には、その時点時点での具体的な外交行為や国際情勢を描いたものもある³⁹⁾が、上述のように米英蔣の困惑・弱体振りを描いたものが最も多く、他のマスメディアと補完しあって、“脆弱アメリカ、恐るるに足らず”の気運を高めていったものと思われる。

米英嘲笑漫画の氾濫と日本漫画会構想の失敗 (1941年12月～1943年4月)

1 米英嘲笑漫画の氾濫

太平洋戦争の開戦は、それまで方向が定まらなかった時局漫画を“米英の敗退・弱体振りを嘲笑う漫画”に収束させていく。『漫画』においても、米英を嘲笑する漫画が溢れだす。上半身が牧師で下半身が馬と狸になっているルーズベルトとチャーチルが日本の飛行機に引っ張られていくさまを描いた近藤日出造の「馬脚・狸尾」(10-2 42.2 図4)や白旗を掲げる英兵の載った新聞を広げた女性が子供に「トムや、お父さまよ」と言っている寺尾よしたかの「紙上対面」(10-5 42.5)等は、端的な絵で米英の敗退振りを印象的に描いている。森熊猛が「正確無比」(10-3 42.3)と題して、香港、マレー半島等と書かれたただるま落しの段を一つずつ叩き落していく日本兵とただるま落しの上で驚いているルーズベルトとチャーチルを描いたものも説明的ではあるが、絵はくどくなく、すっきりと仕上がっている。また、近藤の手になる表紙も、驚いた顔のルーズベルト(10-2 42.2)、泣き顔のチャーチル(10-3 42.3)やルーズベルト婦人(10-12 42.12)等、英米蒋に関係する人々を揶揄したものが、ほぼ半数を占めている⁴⁰⁾。

一方で、単に米英の敗退振りを嘲笑うのではなく、物資や資金の不足及びインフレに苦しむアメリカ⁴¹⁾、インドの独立抗争に手を焼くイギリス⁴²⁾、米英間の不和⁴³⁾等、政治的なテーマをもった漫画も作られた。藤井図夢の「見捨てられたターザン」(10-5 42.5)は、ターザンに見立てたチャーチルが、木にひっかかって印度と書かれた象においていかれ、猿など他の動物たちに笑われているところを描いたものだが、木に宙づりになったチャーチルと涼しい顔でスタスタとチャーチルをおいていく象のさまが滑稽である。近藤日出造の「後釜に飛び込もうとするアメリカ」(10-6 42.6)は、チャーチルの顔をしたライオンの上半身が日の丸をつけたひもに引っ張られ、インドとオーストラリアを押

さえた下半身から離れたところに、ルーズベルトの顔をした虎が飛びこもうとするもので、ばかばかしくはあるが、ユーモラスであり、米英の関係を端的に表現している。

非協会員では、堤寒三と池田永一治の作品が多い。堤の漫画は、端的ではあるが、独特の誇張があり、長めのキャプションと相まって、一枚の漫画の中にストーリー性が感じられる⁴⁴⁾。また、池田のものは、子供が描いたような雑な筆致が特徴で、明るく伸びやかで面白味があるものも多いが、ルーズベルト・チャーチル・蔣の敗退をナポレオンの敗退になぞらえた「遁げまわる包囲陣のインチキ大将共よ あわてゝセント・ヘレナ島に乗りあげまいぞ」(10-5 42.5)などは、薄気味悪く、目をそむけたいような漫画である。

一方『写真週報』においても、1942年に入ると素人の投稿漫画はとり止めになり、協会会員が描いている。後述のように、『写真週報』では戦時生活指導漫画が主流であるが、「茫然の春」(202号 1942.1.7、以下202 42.1.7の形で略記)、「アメリカの憂鬱」(223 42.6.3)等米英を嘲笑う漫画の特集も随時見受けられる。しかし、全体としては、『漫画』に掲載されたものより、アイデアも絵も雑で稚拙である。

以上のような米英を嘲笑う漫画は、第1期同様、当局から示された戦局状況や国際情勢をわかりやすく絵解きしたもので、大衆の時局認識を促進する助けになったと思われるが、米英の弱さ・だらしなさを強調することによって、上述のような開戦以前に抱かれた対米イメージを、英も含めて増幅させる役割も果たしたのではないかと思われる。

上述のように、石子順造は、これらの漫画を漫画家の主体性・表現衝動が欠如したものであるとして厳しく批判したが、ジョン・ダワーは、変化・ウィットに富み芸術的にもしゃれていると評した⁴⁵⁾。与えられたモチーフは、当局によって決定されたものであり、“何を描くか”においては確かに漫画家は主体性を欠いていたが、しかし一方で、上述の近藤や藤井の漫画の絵そのものは、漫画としての面白さ、即ち常識や既成の価値観をひっくり返すような面白さが

あり、“どう描くか”という部分においては、漫画家の主体性が残されていたと言えるのではないだろうか。

また、ダワーの言うように様々な変化やウィットをもった漫画が描けたのは、漫画家たちがルーズベルト・チャーチルを非人間化しなかったからではないかと思われる。この時期、アメリカの新聞や雑誌では、日本人は猿やゴリラや虫として描かれることも少なくなく、人間として描かれる場合でも、日本兵は未開人を表す大きな歯とつり上がった目を共通にもち、憎々しく描かれており、芸術的ではない⁴⁶⁾。宣伝において、敵を残虐非道な非人間、人間以下のものとして描くのは、敵をわれわれとは異なるものだとして認識させることによって戦争行為や大量虐殺を容易にするためであると言われている⁴⁷⁾が、日本の漫画においては、敵は残虐非道というよりも、“世界を征服しようともくろんだが、正義の国日本の強さにしっぽを巻いて逃げ出した哀れな笑い者”として描かれ続けた。おそらくこれは、人間性を笑うことを主眼としたナンセンス漫画の特徴をひきついだものと思われるが、しかし一方では、日本人の戦争観とも関わっていると思われる。佐藤忠男は、日中戦争期の戦意昂揚映画について、「敵を殺すという本来の目的をぬきにして、苦しみに耐え自己を鍛錬するために戦争をしているかのような錯覚さえ生じかねない」と指摘した⁴⁸⁾。映画だけでなく、絵画やポスター等でも、ほとんど敵は描かれなかった。漫画にしる、他の視覚メディアの作品にしる、残虐非道な敵が描かれなかったのは、「敵を殺す」という戦争行為を積極的に支持したというよりも、為政者が始めたのだから仕方がないとして戦争に協力した日本人の民衆意識によるのではないかと思われる。

2 生活世相漫画の戦時生活指導漫画化

太平洋戦争勃発以後、『漫画』はその多くの頁を米英嘲笑漫画にあてるようになり、生活世相漫画は少くなる。その中で、杉浦幸雄の女性を描いた漫画に面白いものがある。「母と娘」(10-10 42.10 図5)は、着物を着て胸を張る

娘に、母が女はそんなに威張らないものだと言うのに対し、娘が「胸を張って歩ませう」の実践だと言い返す漫画で、着物を着て胸を張る不格好さが印象的に描かれているが、どこことなく色香があり、女性漫画の第一人者としての面目がうかがわれる。他に「泥棒」(11-2 43.2)等でも、国策を揶揄する側面と淡いエロチシズムがしのばされており、この時期の漫画としては異色であるとともに出色でもあろう。

上述のように『写真週報』の漫画欄も、太平洋戦争開戦以後は、協会の会員たちが描くようになった。おそらく国策や戦時下のあるべき庶民像を普及・徹底させるには、素人の漫画ではあまりにも稚拙で、情報局も心もとなかったのであろう。しかし、中心になったのは、『漫画』においては二番手である集団以外の会員たちであり、絵もアイデアも集団のメンバーや堤、池田には、総じてかなわなかった。例えば、衣服を買うのを我慢して貯金に行く女性の姿を描いたものは、『写真週報』にも『漫画』にもあるのだが、『漫画』の杉浦幸雄の「貯金の精神」(11-6 43.6)が、伸びやかでユーモアもあり、絵もこなれているのに比べると、『写真週報』の西塔子郎の「断」(234 42.8.19)は、堅苦しく、平凡である。『写真週報』の漫画のつまらなさは、『漫画』が翼賛会宣伝部推薦とはいえ、民間の発行であり月刊であったのに対して、『写真週報』が情報局という官庁の出版物で週刊であったことにもよるであろうし、印刷やスペースの問題もあると思われるが、やはり描き手の力量の差が主たる原因であったように思われる。

第2期の『写真週報』のテーマは、戦力増強・鍛錬・貯金・衣料切符・軍人援護・鉄道輸送協力・節約・資源再利用等日常生活のあらゆる場面に渡っている。251号(42.12.16)では、「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」等の各種標語の漫画化が試みられ、1943年に入ると、毎週「勿体ない」(254 43.1.13 図6)、「明朗に鍛えよう」(269 43.4.28)等のテーマに沿って、国策に励む、親切で勤勉な庶民の姿が描かれる。しかし、これらの漫画は日常生活を題材にしているものの、概して教訓的・偽善的に過ぎ、不自然で行き過ぎという印象を与える。

『漫画』に見られたような副次的ではあるが、国策を揶揄するような側面も見られず、大半は全く笑えない漫画になってしまっている。

富田英三は、上述のように「生活世相漫画」を提唱したが、富田によれば、それは生活の現実把握の芯をもった漫画であった。富田は、現実の日常生活の中に戦時的な題材を拾うことを提案していたのだと思われるが、第2期の『写真週報』の漫画は、どれも現実に根ざしたものというよりも戦時下にあるべき庶民の姿、あるべき戦時生活の態度を描いたものであり、「生活世相漫画」というよりも「戦時生活指導漫画」という方がふさわしいように思われる。しかしながら、これらの漫画は、それぞれに個別のテーマを生活に即して描いたものであったから、抽象的な標語や漠然と美化されたポスター等に比べれば、国策を具体的にイメージさせる効果はあったのではないかと思われる。

3 日本漫画会構想の失敗

日本漫画会の構想は、1942年7月頃にもちあがったものと思われるが、その規約草案によると、同会は「全漫画家の総力結集による国家的宣伝戦への積極的参加及び皇国漫画芸術の建設並びに日本漫画界の完全なる一元化の実現を期するを以て目的とす」るものであり、事業としては「あらゆる国策を主題とせる漫画展覧会の開催」「諸官庁諸団体との連絡」「対外、対内宣伝のための画集、パンフレット、ポスター、ピラ、紙芝居その他の製作及出版」「名実共に国家並びに全漫画界を代表し得る漫画雑誌の刊行」等が挙げられている。会長に北沢楽天、副会長に岡本一平を据える予定であったらしく、長老以下全漫画家を糾合し、報国的活動を行うことを趣旨としていた⁴⁹⁾。しかし、同構想は結局は失敗に終る。

日本漫画会の呼かけ人は、協会会員よりも一世代上の下川凹天・麻生豊・穴戸左行であった。彼等は、漫聯の発起人でもあったが、漫聯解散後は、朝日新聞または読売新聞で漫画を描いていた。しかし、日中全面戦争勃発以降、新聞用紙の制限もあり、新聞が漫画に割くスペースは減少していった。太平洋戦争

期に入ると用紙制限はさらに厳しくなったが、『写真週報』『アサヒグラフ』はじめ雑誌ではある程度漫画のスペースが確保されており、協会会員がその主な描き手となっていた⁵⁰⁾。日本漫画会の設立準備のための最初の会合は、下川が“仕事がなくて困る”と言ったことをうけて、読売新聞が仲介し、加藤悦郎や近藤日出造等を集めて開かれたという⁵¹⁾。

小川の記録ノート『漫画界覚書』によると、先の草案は加藤が作ったものと思われるが、加藤は呼かけ人以上に積極的に動きだし、翼賛会文化部と結ぼうとする。これは、協会が翼賛会宣伝部と結んでいたためではないかと思われるが、この時点では翼賛会文化部の積極的な支持はなかったらしく、このことも日本漫画会が成立しなかった要因の一つであろう。協会では、内部対立もあって、日本漫画会を支持するものもあったが、最大勢力である集団をはじめ、加藤に対する反発は強く、結局協会としては協会独自の強化を図り、日本漫画会には反対を表明することに決定し、日本漫画会構想は流産することとなる。

協会側の反対は、加藤個人に対する感情的なものが大きかったが、政治宣伝的な漫画に対する警戒・反感もあったと思われる。また、小川武は、日本漫画会の運用にも疑問をもっていたようである。小川は、協会に対し、“協会何もしなかった、あってなきが如く”と不満を記しているが、それは具体的には、協会が人選と稿料の問題を解決できないこと、つまり能力も責任感もない委員同志がもめごとを繰り返し、当局の注文に適した人材を選び、適当な稿料を交渉し、選にもれた人を押さえることができないでいることへの不満であり、小川は、新しい組織はこの問題を解決すべきだと考えていたと思われる⁵²⁾。しかしながら、日本漫画会の準備会では、このような運用の問題については話合われなかったようであり、日本漫画会も小川の期待に応えられるような団体ではなかったと思われる。

結局、日本漫画会構想とは、下川・加藤等が、政治漫画を復権させ、自分たちが主導権を握って、国家的な仕事と収入を確保することを試みた政治漫画派の巻き返しであったと言えようが、太平洋戦争の緒戦の勝利の下、漫画が米英

嘲笑漫画と戦時生活指導漫画に収斂し、当局と描き手の関係も安定する中で、現状変革の必然性は薄く、協会の抱える問題を解決しえないような団体では失敗せざるを得なかったと思われる。

日本漫画奉公会の結成と漫画の亢進化と空疎化 (1943年5月～1945年8月)

1 日本漫画奉公会の結成と当局の関与

日本漫画奉公会（以下「奉公会」と略記）は、老大家から新進まで約80名の漫画家を会員として、1943年5月1日に結成されるが、これは日本美術報国会・日本版画奉公会と並ぶ翼賛会文化部による美術分野一元化の一環であった⁵³。同会の規約等は不明だが、「全日本漫画家を打って一丸とした強力なる一元化体制を確立し、その総力を挙げて国家目的の達成に粉身する」ことを趣旨としていた⁵⁴。

小川の『漫画界覚書』によると、4月16日の第一回懇談会は、翼賛会側から3人、漫画家側から北沢楽天・岡本一平以下16人が出席して行われたが、「主催者側と当局の挨拶と賛成演説にヲワ」ったと言う。4月18日に行われた第二回懇談会でも、高橋翼賛会文化部長・八並翼賛会宣伝部長・林情報局情報官等が挨拶し、逼迫する時局の下で戦時生活を明るいものにし、国民運動の普及に協力するよう漫画への期待を述べている。これに応じて、漫画家側からも、“総力を尽くす”“研究を図る”等の意見が出され、奉公会への賛成が表明されるが、その中で、内容は不明だが小川が翼賛会へ注文を出したことと近藤が“マンガを狭義化する”“資料獲得団体になるのは残念”等と奉公会への反対意見を述べたことは目を引く。しかし、近藤の意見は、奉公会の問題を衝いている面もあるものの、翼賛会文化部とそれをバックにした老大家にイニシアティブをとられたことに対する反感によるところも大きいと思われる。

この第二回懇談会及び当局側も含めた第一回、第二回世話人会（4.19、

21)において、規約・役員定款・会員資格及び事業のアウトラインが決められた。そして、5月1日に会長北沢楽天・顧問岡本一平・副会長田中比左良という布陣で奉公会は発会式を迎える。発会式においても、翼賛会・情報局・大本営等の関係者の挨拶が続いた。

しかし、運用方針については、またも未整備のまま等閑に付された。前述の小川の翼賛会への注文は、この問題に関するものではないかと思われるが、十班制の班別構成との方針が決まったのは発会式後の5月7日である。班別構成は、「年よりと若い人の融和を計る」⁵⁵⁾ためとされたが、その融和の中で新しい漫画の機軸が打ち出されたわけではなく、これは各グループの解消のための方便であったように思われる。この方針を受けて、協会は6月30日に解散する。仕事の人選、謝礼金の分配及び事務局の整備等小川の心配していた問題については、5月14日の総会でかなりもめたらしいが、どのように決着がついたのかについて小川は記していないので、現在のところ不明である。

小川の『漫画界の動向』には、1944年までの記録しか残されていないが、奉公会の活動は展覧会・慰問活動を中心にかなり盛んであったようである。漫画の内容については後述するが、翼賛会文化部・情報局だけでなく軍や新聞社主催の展覧会等もあり、また、荷役奉仕にも駆りだされている。翼賛会文化部・情報局は、定例懇談会を開き、そこで意見を述べていたが、小川は「定例懇談会は時局認識と当局の意志を知るに便」として、歓迎している。また、1944年7月の役員改選については、「情報局より現状のまゝであるやう申出ありに依り全員その趣旨に従ふ事」とあり、情報局の発言権の強さがうかがわれる。

以上のように奉公会は発足から一貫して国家機関の主導の下に置かれた。日本漫画会構想というベースがあったことも、奉公会の結成をスムーズにした要因であろうが、日本漫画会構想には残存していた漫画家の自主性・主体性は、奉公会に移行する過程で弱められ、奉公会は結局は統制と動員のための官の下請団体に終始した。

奉公会の解散については、詳細は不明であるが、敗戦後の8月23日に加藤悦郎・麻生豊・小川武等12人が集まり、「漫奉の使命は、8.15で一と通りだった」のであり、また、機構を残しても敵に利用される心配もあることから、解散を決めたという⁵⁶⁾。そして、彼等はまたグループを作り、米兵の似顔絵描きなどをしながら、戦後を歩き始める。

2 米英嘲笑漫画のグロテスク化と悲哀化

本節及び次節では、『漫画』『写真週報』両誌に加え、出版印刷物に掲載された奉公会の作品（日本漫画奉公会編『決戦漫画輯』（教学館 1944年）と新聞雑誌に掲載された漫画）も分析の対象とする。

戦局が悪化の一途をたどる第3期において、当局が漫画に期待したことの一つは、敵の非人道性・残虐性・野獣性等を描いて、敵愾心を煽り、米英撃滅の掛け声を後押しすることであった。『週刊朝日』（1943.6.27）の「漫画敵国陣営撃破号」という特集は、奉公会発足直後の仕事の一つであり、30余りの奉公会会員の作品が掲載された。この特集では、米英撃滅漫画は3分の1程にすぎないが、その大半を大家の作品が占めている。その一つ、表紙の北沢楽天の「人道の敵」は、インディアン姿のルーズベルトとチャーチルが、赤十字のマークのついたテントに向かって斧を振りあげているところを描いたもので、写実的で、二人の人相も憎々しく描かれている。病院や病院船、学校等への攻撃をテーマにしたものは、『決戦漫画輯』にもいくつか見られる⁵⁷⁾（図7）が、これら個別・具体的な行為を題材にした漫画は総じて、敵の非人道性・野蛮性を表現することに成功していると思われる。しかし、全体としては数も少なく、他国のものと比べるとまだ穏やかであった。

「漫画敵国陣営撃破号」の主流は、依然米英の弱さを強調するものであり、ドンキホーテ主役に扮したルーズベルトとチャーチルが、枢軸国の頑強な守りに阻まれ放浪する姿を描いた岡本一平の「20世紀のドンキホーテ」のような漫画であった。また、『決戦漫画輯』においても、米英蔣の敗退⁵⁸⁾や膨大な軍

事予算に苦しむアメリカ⁵⁹⁾、米英の不和⁶⁰⁾といった第2期から引き続く広く漠然としたテーマが大半で、絵は上手いが訴求力に乏しいものが多い。岡本や幸内純一等大家の作品には、上述のように古典などになぞらえるという政治風刺漫画の伝統的な手法を使用したものがある⁶¹⁾が、総じて言えば、大家の作品はくたくたくと説明的で、感情に訴えるようなものではない。しかし、中堅・若手たちの作品もまた、敵愾心を昂揚できたようには思えない。藤井図夢の「徒らに騒がしき音楽」(『週刊朝日』1943.8.15)は、連合国首脳で編成されたオーケストラをルーズベルトが指揮しているところを描いて、その不和を揶揄したもので、各人の特徴が端的にとらえられており、漫画としては面白いが、敵に対する憎悪をかきたてるようなものではない。

一方『漫画』においては、ルーズベルト・チャーチル・蔣を悪魔や未開人、ねずみ等の動物として描き、非人間化を図ったものが出てくる⁶²⁾(図8)が、しかし、内容的には米英蔣の敗退・苦戦を描いたものであり、非人道性や残虐性を訴えるものではない。また、表紙においても、骨をくわえているチャーチル(11-12 43.12)や肉を食いちぎろうとしているルーズベルト(12-8 44.8)は、不気味で残忍な雰囲気があるが、頭に槍の刺さったチャーチル(12-4 44.4)や四方から殴られ青くなっているルーズベルト(12-11 44.11)等、弱くみじめな姿で描かれているものも多い。

第3期の『漫画』においては、現実の反作用であるかのように、第2期よりもさらにルーズベルト・チャーチル・蔣の衰れでみじめな姿を描く傾向が強くなっている。人間・非人間合めて、それらは第2期同様様々なパリエーションをもっており、しゃれたものもあるが、グロテスクなものも登場する。特に、非人間として写實的に描かれた場合、その写実性が気持ち悪さを強める効果を持っている。第3期に入ると、戦況の不利が報道されるようになり、また、1944年の後半には空襲が現実化し、民衆の間には、正義感というよりも復讐心に基づく敵愾心が一部に見られるものの、米英への恐怖心が広がっていく。当局はアメリカの残虐性を強調することで、国民の戦意を継続させようとし、

「おどかし」物語を宣伝に盛り込むようになる⁶³⁾が、漫画のグロテスク化は、一方でこの当局の方針に応えるものであると同時に、他方では民衆の恐怖心に見合うものでもあったと思われる。下半身が動物化し、歯を向いて襲いかかろうとする米兵に日本の民衆が立ち向かっている安本亮一の「今だ！敵の腰は伸び切って居る」(12-9 44.9)は、“敵の腰が伸びきった今こそ反攻の時だ”と訴える新聞報道⁶⁴⁾にヒントを得たものであると思われるが、絵には当時の国民の敵愾心と恐怖心が反映されているように思われる。

第3期の『写真週報』には、石川進介⁶⁵⁾等団体のメンバーや宍戸左行、安本亮一等の作品も散見できるが、やはり米英に関する漫画は少ない。しかし、その中でもルーズベルトやチャーチルの非人間化が図られており、宍戸左行が「鬼畜の内緒話」(294 43.10.20 図9)で描いた角のはえたルーズベルトとチャーチルは、「鬼畜」と呼ぶのにふさわしい鬼とも獣ともつかぬ姿態で、奇怪で薄気味悪い。

これらグロテスク化した漫画は、受け手に気持ち悪さや嫌悪感を感じさせ、一時的には憎悪を煽ることもできたのではないかと思われるが、どこか滑稽さの残るものもあり、戦意を継続させる助けにはならなかったのではないかと思われる。

奉公会では、1944年6月に翼賛会文化部からの仕事で、米英憎悪人物漫画を作画しようとするが、ものにならなかったようである⁶⁶⁾。情報局でも「日本の漫画を見るに、ルーズヴェルト、チャーチルを描きて、ユーモラスなり」「米英人の感覚的にして、動物的支配慾のみなる下等動物感未だ国民に徹底せず」と記している⁶⁷⁾。第3期においては、敵の非人道性や野蛮性、野獣性を描いて、米英への憎悪を煽る漫画も少しはあったが、主流は米英のさらなる哀れさを嘲笑する漫画であり、大家・中堅・若手共々、当局が期待した敵愾心昂揚という役割を十分に果たすことはできなかったように思われる。

3 戦時生活指導漫画の空疎化

上述のように、当局関係者は奉公会結成にあたって、漫画に戦時生活明朗化の一助となることを期待していた。しかし、実際に奉公会の活動が始まると、当局は「もっと日常茶飯時より取材し加ふるに決戦の決意を行動に現はせ」⁶⁸⁾、「宣伝の傾向として強腰に呼びかけてほしい」⁶⁹⁾等の意見を出した。当局においては、生活明朗化への期待も確かにあったであろうが、それ以上に逼迫する生活や罹災に耐え、空襲にも立ち向かうような、あるべき庶民像、決戦生活への心構えを表現することの方が重視されていたように思われる。

奉公会最初期の仕事に、朝日新聞と毎日新聞へ一日一枚、貯蓄や増産等の国策に喜んで協力する庶民の姿を描くものがあったが、面白いものではなく、小川も「国策にテラヒすぎ内容に必然性とぼしく、両者とも15 - 20回足らずで立消へ」と記している⁷⁰⁾。また、前述の『週刊朝日』の「漫画敵国陣営撃破号」に掲載されたものも、工場へ出勤する女性工員が母親に敬礼しているのを、弟や近所の人たちが万歳で送り出している山川哲の「天晴れ産業戦士」をはじめ、国策迎合的なものが多い。『決戦漫画輯』においても、増産に励む工員を描いたもの⁷¹⁾(図10)や航空兵志願を奨励するもの⁷²⁾等が多く、全体としては戦時生活の明朗化よりもしめつけに与していると思われる。

『写真週報』においても、やはりこの傾向が強く、貯蓄・増産・労働を中心に決戦生活に励む庶民の姿が溢れている。貯蓄や生産額の右上がりのグラフはよく出てくる題材だが、秋玲二の「隣組貯蓄成績表」(282 43.7.28)は、三枚も紙を継ぎあわせ、「この調子じゃ来月は天井にとどきますよ」と上機嫌の組長を描いたものである。しかし、この時期庶民は現実には貯蓄の割当てに苦しんでいた⁷³⁾のであり、この漫画はいかにも絵空事という印象を与える。さらに、空襲が始まり、庶民が空襲の被害を受けるようになると、空襲があったおかげで用水池を掘る手間が省けた⁷⁴⁾とか外で風呂に入れた⁷⁵⁾等、空襲があつて却ってよかったというような漫画も登場する。しかし、このような漫画は罹災者から見れば、不快極まりないものであったのではないだろうか。

『漫画』においても事情は大同小異で、吊り革の破損が多くなった電車の中で、おばあさんが隣のおじいさんのひげにつかまっている秋好馨の「臨機応変」(12-12 44.12)等、素朴な面白味のあるものもあるが、貯蓄や増産に励むあるべき庶民像⁷⁶⁾が基調であり、1944年夏以降は国内の敵への批判も登場する。1943年後半には、『写真週報』や新聞に輸送戦に協力しない庶民を批判する漫画⁷⁷⁾が描かれ、『決戦漫画輯』においても、工場勤めをせず着物を着て歩いている女性やおしゃべりをして防諜の心構えのない人々を批判するような漫画⁷⁸⁾が掲載されているが、1944年夏以降は、働かずにのんびりくらす有閑階級や宴会を楽しむ特権階級への批判が先鋭になり、さらには落ち着きなくけんかをしたり、いらだったりする庶民への批判が加わる⁷⁹⁾。国策に非協力的な庶民への批判には、建前的なところもあるように見受けられるが、44年夏以降のものは、庶民の実情・実感を反映しているように思われる。

また、この時期の『漫画』には、日本画的な手法を用いた漫画も見受けられる。横山隆一は、富士山をバックに山本五十六を浮び上がらせ、「元帥に続け」等と書いた幟を立てて、富士山に向かっていく群衆を描いた(11-7 43.7)。山本だけが多少写實的に描かれているが、山も群衆も輪郭だけを青の濃淡で描いた墨絵のような絵であり、静かさ・厳かさが逆に敵愾心を煽るようなポスター的な作品である。しかし、一方で横山は、ロボットが暴れている「科学戦士ニューヨークに出現す」(11-8 43.8)のような彼らしい作品も描いている。奉公会でも、毎日新聞に「漫画新兵器」を連載した(1944.3.8~11)が、いずれも荒唐無稽なものである。新兵器を描いた漫画は、初めから全く架空の話であると承知している分だけ、描くのも見るのも気楽であったかもしれないが、発想も貧困でばかばかしいものが多く、戦時生活明朗化にも科学精神振興にも役立ったとは思われない。

第3期に描かれた決戦生活は、現実には無理であり、宣伝以前に最早実践の余地のないようなものであった。中には、家族を疎開させた男性が炊事や買物にいそしんでいる姿を軽妙なタッチで描いた塩田英二郎の「近頃都市台所風景」

(『写真週報』337 44.9.6)のように、現実の庶民の生活に根ざした漫画もあり、決戦の覚悟や「顔」役への憤慨等一部民衆の感情に見合うところもあったと思われるが、全体としては、第2期よりもさらに教訓的・偽善的になり、空疎化が一層進んだと言えるのではないだろうか。

むすび

佐藤忠男によると、風刺というのは本来罵倒的で攻撃的なものであり、漫画の罵倒性・攻撃性は低俗であることによって保証されるという⁸⁰⁾。低俗性と大衆性・庶民性は必ずしも一致するとはいえないが、戦時下の漫画は、当局に取り込まれたがためにこの低俗性・大衆性を放棄せざるを得なくなり、庶民の生活を描きながらも大半が庶民の観念や感情、現実の生活の臭いから乖離することとなり、大衆への訴求力を弱めたように思われる。しかし、当局も漫画家たちもこのジレンマを自覚していたとは思われない。一方、敵や国際情勢を描いたものも、その内容の多くは当局の観念やマスメディアの作り出したイメージであり、上から与えられたものであった。漫画家各人が、それぞれの立場・観点から具体的事象をとらえ、それぞれの技法によってその事象を誇張して描き、敵を批判・攻撃するのが政治漫画の本領であったと思われるが、漫画家各人が独自の立場や観点をもてず、自らの立場や観点を当局の立場や観点と同一化せざるを得なかったところに、戦時下の政治漫画の低迷の一因があったのではないかと思われる。具体的現実の把握が難しかったことや国内の敵への批判が否定されたことも政治漫画を制約したであろう。戦局や政治状況の実態を知らず、独自の見方や批判の切り口をもたない漫画家が、敵や政治状況を表現しようとするれば、与えられえたものをいかに描くかというアイデア競争になるのは当然であっただろう。本質的な風刺より図像上の笑いが重視される状況の中では、政治漫画よりも端的な絵と笑いを主眼としたナンセンス漫画の方が展開しやすく、その結果、その時々表面的な戦局や政治状況を盛り込みながら、ルーズ

ベルト・チャーチル・蔣を嘲笑う漫画が大量に描かれることになったと思われる。しかし、それらの漫画は、バラエティに富んではいたものの、受け手からすれば、どれも似たようなもので、イメージとしては浸透しても、行動への動機付けには至らなかったのではないかとと思われる。

また、漫画は純粋絵画と異なり、その絵の表わす意味は一義的であり、どちらかと言えば絵よりも意味に重点があるという⁸¹⁾。表現そのものへの規制が弱かったのは、当局の認識の低さもあるが、漫画のこの特徴のためでもあろう。また、この一義性のゆえに当局は漫画を国策宣伝に取り込もうとしたのであろうが、この点でも当局は漫画の本質を理解していなかったと言えよう。当局は漫画によって、当局の考える敵やあるべき庶民の一義的なイメージを伝達し、その固定化を図ろうとしたのであるが、漫画の本質である風刺と笑いとは、既成の秩序意識や価値観を意識的に主体的にひっくり返すことから生じるという⁸²⁾。上述の大衆性と重ねあわせれば、漫画とは、具体的な政治状況や社会状況に対し、それが拠って立つところの秩序意識の誤謬や矛盾について、大衆の側の価値観から事象をとらえ直し、批判した絵であり、既成の秩序意識や権威者側の価値観を批判するものではあっても、それを強化するものではないと言えよう。従って、漫画の本来の存在価値から言えば、漫画は権威者側の宣伝にはなじまないものであるのだろう。一義的なわかりやすさのみを見て利用しようとしたところに当局の失敗があったのではないかとと思われる。

協会や奉公会によった漫画家たちは、協会や奉公会を通じて、漫画を描く場を与えられた。しかし、そこには当局からの注文や上述のような制約があった。おそらく漫画家たちは、不自由を感じながらも、与えられた仕事を与えられた枠組みの中でこなしていったのであろう。彼等が、戦後自分たちの活動を主体的に受けとめることができなかったのは、その不自由感や受け身的な意識のためであっただろう。また、彼等の活動や漫画観は、戦前・戦中・戦後を通じて連続しており、この連続性もまた戦時下の活動への意識を薄めさせたように思われる。

戦時下の漫画家は、国内で以上のような漫画を描いていただけではなかった。前線で撒かれるビラを制作したのもあった⁸³⁾し、報道班員として戦地に送られ、現地で宣撫活動にあたった漫画家もあった⁸⁴⁾。奉公会では農村や工場への慰問も行われたし、『漫画』には毎号のように座談会や各種施設の訪問記等も掲載されている。また、『漫画』『写真週報』以外の雑誌にも多数の漫画が掲載されている。戦時下の漫画については、以上のような多岐にわたった漫画家の活動を総合的に検討していく必要があると思われるが、今後の課題としたい。

(付記) 本稿を作成するにあたって、さいたま市立漫画会館木部史子氏、日本漫画資料館清水勲氏、川崎市市民ミュージアム細萱敦氏に、資料上でお世話になりました。記してお礼申し上げます。

注

- 1) 通史・事典類としては、須山計一『漫画博物志 日本編』(番町書房 1972年)、同『日本漫画100年』(芳賀書店 1974年)、清水勲『日本 漫画の事典』(三省堂 1985年)、同『漫画の歴史』(岩波書店 1991年)等がある。擁護の立場を鮮明にしているものに、石子順『日本漫画史 上』(大月書店 1979年)、峯島正行『近藤日出造の世界』(青蛙房 1984年)がある。また、図録的なものであるが、清水勲『太平洋戦争期の漫画』(美術同人社 1971年)も擁護の立場をとっている。
- 2) 前掲 石子順『日本漫画史 上』230頁
- 3) 漫画家の戦争責任を追及するものとしては、他に櫻本富雄の『戦争とマンガ』(創土社 2000年)がある。また、佐藤忠男は、戦争責任の追及を主眼にしてはいないが、『日本の漫画』(評論社 1973年)や『漫画と表現』(評論社 1984年)等で、戦時下の漫画について分析している。
- 4) Rei Okamoto『PICTORIAL PROPAGANDA IN JAPANESE COMIC ART,1941-1945:IMAGES OF THE SELF AND THE OTHER IN A NEWSPAPER STRIP,SINGLE-PANEL CARTOONS,AND CARTOON LEAFLETS』 Doctor of Philosophy Temple University 1999
- 5) 前掲 石子順『日本漫画史 上』231頁
- 6) 『漫画』は『銀座』という雑誌を継いだため(小川武記録ノート『漫画界の動向』注8参照、前掲 峯島正行『近藤日出造の世界』199~200頁)、8巻9号(1940.10.29

- 発行 1万2千部)が創刊号にあたる。発行は漫画社。小論の資料としたのは、8巻9号から1945年6、7月合併号まで(日本漫画資料館・川崎市市民ミュージアム所蔵 但し、9巻7号、10号、10巻1号、9号、11巻10号、1945年1～4月号を除く)。8巻9号から9巻6号(1941年6月号)までは「新日本漫画家協会機関誌」、9巻7号(1941年7月号)は未確認であるが、9巻8号(1941年8月号)から(前掲 峯島正行『近藤日出造の世界』210頁によれば、9巻7号から)11巻4号(1943年4月号)までは「大政翼賛会宣伝部推薦」の肩書がある。11巻5号(1943年5月)からなくなるのは、日本漫画奉公会の結成と関係があるのではないかと思われるが、明確な理由は不明である。また、10巻2号(1942年2月号)から12巻3号(1944年3月号)までは「眼で見る時局雑誌」とあるのが、12巻4号(1944年4月号)から12巻12号(1944年12月号)までは「画報雑誌」になる。定価は、12巻1号(1944年1月号)までは、半数ほどが30銭と明記されている。
- 7) 204号(1942.1.21)から「照準器」と命名され、315号(1944.4.5)から「手榴弾」に改名される。
 - 8) 記録ノートは、『No.224 新日本漫画家協会記録』、『No.225 漫画界覚書 附・航空マンガ研究会ノート 昭和十七年六月 - 十八年五月至』、『No.227 漫画界の動向 漫画奉公会・史 注目すべき各作家の活動史』の3冊。スクラップブックは、表紙に『No.226 戦争直前の漫画界 昭和15(1940) 19(1943)』、中表紙に『戦時新体制と漫画界の動き(内幕)資料 1940昭和十五年八月より』と記載された1冊。いずれも小川武の署名入り。さいたま市立漫画会館所蔵。
 - 9) 小論では大人向けの宣伝に関わる漫画のみを分析の対象とするため、子供漫画・家庭漫画等の系譜は含めない。また、風俗・世相漫画は社会漫画に属するものと考え
 - 10) 岡本一平「総論」(日本漫画会編『漫画講座』第1巻 建設社 1933年)、幸内純一「時局漫画の考へ方」(『漫画講座』第3巻) 加藤悦郎『漫画家養成講義録高等科講義 漫画の批判と鑑賞』(日本漫画研究会 1937年)、松山文雄『漫画家養成講義録高等科講義 史的に見たる漫画様式』(同前)等
 - 11) 「日本漫画家聯盟規約」、また「日本漫画家聯盟第一会報」によると、発足時の会員は125名で、堤寒三、松山文雄、小川武、須山計一、加藤悦郎、安本亮一等が参加した。
 - 12) 片寄みつづ「加藤悦郎論」(加藤悦郎漫画集刊行会『加藤悦郎漫画集』 1960年 72頁)
 - 13) 1934年結成、北沢楽天門下の漫画研究グループ
 - 14) 1933年結成、堤寒三・下川凹天・麻生豊・宍戸左行につながる若手漫画家グループ
 - 15) 前掲 加藤悦郎『漫画の批判と鑑賞』、松山文雄『史的に見たる漫画様式』
 - 16) 前掲 峯島正行『近藤日出造の世界』125頁
 - 17) 清水勲「用語による昭和マンガ前史 ナンセンス漫画」(『昭和のマンガ展』図録 1989年 43頁)

- 18) 「漫画家の協力」(長浜功編『国民精神総動員運動民衆教化動員資料集成』明石書店 1988年 274~5頁)
- 19) 小川ノート『漫画界の動向』
- 20) 峯島正行は、三光漫画スタジオと新鋭マンガグループが、縮小する漫画市場を集団に独占されるを防ぐために、集団その他のグループに呼びかけて協会を結成したとしている(前掲『近藤日出造の世界』195~6頁)。
- 21) 「新日本漫画家協会規約(草案)」(小川スクラップブック)
- 22) 小川のスクラップブック『戦争直前の漫画界』によると、新日本漫画家協会の会員は個人会員も含めて、1940年10月8団体65名、1941年8月6団体1社64名、1943年1月5団体1社64名。
- 23) 近藤日出造「機関誌『漫画』に就てのことども」(「新日本漫画家協会会報」小川スクラップブック)、富田英三「漫画の動向」(『漫画』8-10 40.12)
- 24) 「大政翼賛会の宣伝政策を聴く座談会」(明治大学報国団学術研究部『駿台広告』第8号 1941年12月 39頁)で、翼賛会の宣伝で漫画を使った成功例として挙げられているのが、「大和家」であると思われる。
- 25) 小川ノート『漫画界の動向』
- 26) 森熊猛「形式主義者」(8-10 40.12)、をぎ原賢次「国民服的談義」(9-6 41.6)等
- 27) 秋好馨「飲めもしないくせに「折角の配給品を無駄にするのは馬鹿らしい」だなんて言ってネ」(9-12 41.12)等
- 28) 小川哲男「平素の訓練」(8-10 40.12)、西川辰美「帰還者同志」(9-8 41.8)等
- 29) 峯島正行は、この変化を用紙の確保と売上の問題からとらえている(前掲『近藤日出造の世界』210頁)。梶井純は、用紙・配給を第一の理由としているものの、この変化はそれだけにとどまらず「さまざまな意味で多大な力を発揮した」との見解を示している(前掲『執れ、鷹懲の銃とペン』188頁)。小川ノート『新日本漫画家協会記録』には、9巻7号(41.7)は、拙いことを理由に用紙の配給が停止され、発行が遅延したと記してあるが、肩書の変化の理由については記されていない。
- 30) 「新日本漫画家協会九・三〇総会報告(大要)」(小川スクラップブック)
- 31) 募集要項には「・明かな国策漫画・原稿は墨で描くこと・掲載の分には薄謝」とある(『写真週報』102 40.2.7)。なお、1940年6月から9月までは、漫画頁は設けられていない。
- 32) 士気の低さを嘆くものに塩田英二郎「おゝ精銳なる諸君よ」(9-8 41.8)、問題山積に困惑するものに小川哲男「この馬この途どう乗りこなす?」(8-10 40.12)、蔣を笑うものにセンバ太郎「投下(燈下)親しむ唄」(8-9 40.11)等がある。
- 33) 横井福次郎「太平洋作戦」(9-3 41.3)、横山隆一「科学先進国のうぬぼれ」(9-3 41.3)等
- 34) 近藤日出造「操られしか」(9-5 41.5)、清水崑「歴史はくり返さない」(9-8 41.8)等
- 35) 小野佐世男「弾丸除け」(9-5 41.5)、石川進介「盗賊A Bの逆手」(9-11 41.11)等

- 36) 掛川トミ子「マス・メディアの統制と対米論調」(細谷千博ほか編『日米関係史4』東京大学出版会 1972年) 佐伯彰一「仮想敵としてのアメリカのイメージ」(加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ』日本学術振興会 1991年) 三輪公忠「対米決戦のイメージ」(同前) 田中秀東「児童雑誌『少年倶楽部』における対米イメージ」(上智大学アメリカカナダ研究所編『アメリカと日本』彩流社 1993年)等がある。
- 37) 前掲 佐伯彰一「仮想敵としてのアメリカのイメージ」223頁
- 38) 前掲 掛川トミ子「マス・メディアの統制と対米論調」60頁
- 39) 藤井図夢「わが外交振ふ」(9-6 41.6) 小野佐世男「この木良爺め(仏印共同防衛)」(9-9 41.9)等
- 40) 東條英機、杉山元、満州国國務総理張景惠等日本の閣僚や軍人及び大東亜共栄圏の同盟国や傀儡政権の首脳が半数足らずあり、他にガンジーやスターリン等がある。
- 41) 佐次たかし「持たざる国アメリカの嘆き」(10-2 42.2) 小川哲男「まだ足りない、まだ足りない」(10-4 42.4) 藤井図夢「烈風」(10-7 42.7)等
- 42) 川口久「逆説イソップ」(10-5 42.5) 和田義三「何時まで笛吹ききれる」(10.5 42.5)等
- 43) 塩田英二郎「A・B・D・A責任なすり合ひ会谈 住民達たちこそ良い面の皮」(『漫画臨時増刊 米英南方追放号』42.4)等
- 44) 「米英愁嘆の真相」(10-4 42.4) 「ガンジーの一矢」(10-7 42.7)等
- 45) ジョン・ダワー『人種偏見 - 太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』(斎藤元一訳 TBSブリタニカ 1987年) 307頁
- 46) 前掲 ダワー『人種偏見』42、109、119、151頁、友野茂『アンチ・ジャパン』(三交社 1995年) 161~206頁の図版
- 47) サム・キーン『敵の顔』(佐藤卓己・佐藤八寿子訳 柏書房 1994年) 32頁
- 48) 佐藤忠男『日本映画史』第2巻(岩波書店 1995年) 39頁
- 49) 小川ノート『漫画界覚書』、規約草案は同ノートに印刷物がはさみ込まれており、十七・九・三の日付がある。
- 50) 前掲 櫻本富雄『戦争とマンガ』
- 51) 小川ノート『新日本漫画家協会記録』
- 52) 小川ノート『漫画界覚書』には、協会への不満、協会の問題点とともに組織案も記されている。
- 53) これら三団体は1943年春の戦艦献納運動を機に設立準備が始まったという(『大政翼賛』113号1943.4.28、北河賢三編『資料集総力戦と文化 第1巻』大月書店 2000年 60頁)。
- 54) 小川ノート『漫画界の動向』
- 55) 小川ノート『漫画界の動向』
- 56) 小川ノート『漫画界の動向』
- 57) 太田天橋「敵の本態悪鬼」、中村圭助「基督も怒る」(図7)等

- 58) 那須良輔「地獄への進軍」、同「ビルマ反攻」等
- 59) 宍戸左行「米国の龐大軍事予算」等
- 60) 安本亮一「だんだん裸にされる彼奴」等
- 61) 岡本一平「二人シャイロック」(『週刊朝日』1943.8.15)、幸内純一「新紅葉狩」(『決戦漫画輯』)等
- 62) 田内正男「風車悲劇を乗せて」(11-12 43.12)、近藤日出造「くぢかれた出鼻」(12-1 44.1)、石川進介「日本に時を藉すな」(12-2 44.2 図8)、塩田英二郎「米英蔣共同反攻作戦」(12-5 44.5)等
- 63) 川島高峰『銃後』(読売新聞社 1997年)170頁
- 64) 『朝日新聞』1944年6月17日
- 65) 石川進介は、途中抜けているところもあるものの、太平洋戦争開戦以来『写真週報』の「照準器」頁の一部に設けられた「大東亜戦争漫画日誌」欄を担当し、時局をコマ漫画に表わしていた。第3期には、「照準器」頁のほとんどを石川の一枚もの数点にあてる週がある(305 44.1.19、307 44.2.2等)。なお「大東亜戦争漫画日誌」は、情報局から単行本としても発行された(前掲 櫻本富雄『戦争とマンガ』291頁)。
- 66) 小川ノート『漫画界の動向』
- 67) 『雑誌指導方針実現方策(案)』(赤澤史朗・北河賢三・由井正臣編『資料日本現代史13』大月書店 1980年)190頁 原文は片仮名書
- 68) 日華展の下絵を見ての情報局の意見(小川ノート『漫画界の動向』)
- 69) 情報局定例懇談会での意見(小川ノート『漫画界の動向』)
- 70) 小川ノート『漫画界の動向』
- 71) 秋玲二「増産の成績表」、小川武「飛ぶぞ呑龍、鍾馗!」等
- 72) 小川哲男「学鷲の父」、池田さぶろ「象牙の塔から空の決戦場へ」等
- 73) 須崎慎一「戦時下の民衆」(木坂順一郎編『体系・日本現代史 第3巻 日本ファシズムの確立と崩壊』日本評論社 1979年 194~5頁)、前掲 川島高峰『銃後』141~2頁
- 74) 杉征夫「盲爆大助かり」(355 45.1.17)
- 75) 小泉紫郎「洗い流す」(367 45.4.18)
- 76) 合作「産業報国」(11-12 43.12)、合作「空襲何ぞ恐るべき」(12-4 44.4)等
- 77) 合作「決戦列車轟進」(『写真週報』291 43.9.29)、森比呂志「輸送を紊す者は誰だ」(『読売報知新聞』1943.12.25)等
- 78) 利根義雄「お友達」、池田寿夫「敵はすぐそばにいる」、細木原青起「誰一人不許逆行」等
- 79) 杉浦幸雄・秋好馨「それでも君は日本人かつ」(『漫画』12-8 44.8)、南義郎「足のある幽霊」(『写真週報』341 44.10.4)等
- 80) 佐藤忠男「戦後の政治漫画」及び「低俗から生まれる文化」(前掲『日本の漫画』241~3頁、351頁)
- 81) 佐藤忠男「戦後の前衛漫画」(前掲『日本の漫画』253頁)、石子順造「日本の現代

- 漫画にかんするノート」(『コミック論』喇嘛社 1988年 255頁)
- 82) 佐藤忠男「荻原賢次論」(前掲『日本の漫画』275頁)、石子順造「日本の現代漫画にかんするノート」(前掲『コミック論』255～8頁)
- 83) ピラ・伝単の資料集としては、鈴木明・山本明編『秘録・謀略宣伝ピラ』(講談社 1977年) 平和博物館を創る会編『紙の戦争・伝単』(エミール社 1990年)があり、『日本週報』(1959年6月臨時増刊号)にも、資料及び制作者たちの証言が掲載されている。研究としては、山本明「戦時宣伝ピラのイデオロギー」(一)～(三) (『展望』229～231号 1978年1～3月)、岡本玲「太平洋戦争期の漫画伝単」(『諷刺画研究』第34号 2000年5月20日)がある。
- 84) 『決戦漫画輯』の「共栄圏の横顔」には、12人の漫画家が報道班員として送られた各地の様子を描いている。ジャワに派遣された横山隆一・小野佐世男の活動については、町田敬二『戦う文化部隊』(原書房 1967年)や横山隆一『わが遊戯的人生』(日本図書センター 1997年)等で触れられている。また、マレーでは、吉野弓亮が宣撫劇「桃太郎」の舞台美術全般を担当したという(小出英男『南方演芸記』大空社 2000年)。

図版出典

- 1) 『漫画』(8-10 40.12) 表紙：清水崑「英米の現状」 裏表紙：横山隆一「常会は丸く暖かく」 川崎市市民ミュージアム所蔵
- 2) 加藤悦郎「傍観者 これが日本人の態度か」 『漫画』(8-10 40.12) 川崎市市民ミュージアム所蔵
- 3) 塩田英二郎「簡単服」 『漫画』(9-8 41.8) 川崎市市民ミュージアム所蔵
- 4) 近藤日出造「馬脚・狸尾」 『漫画』(10-2 42.2) 日本漫画資料館所蔵
- 5) 杉浦幸雄「母と娘」 『漫画』(10-10 42.10) 日本漫画資料館所蔵
- 6) 西塔子郎「これだけあれば」 『写真週報』(254 43.1.13) 立命館大学国際平和ミュージアム所蔵
- 7) 中村圭助「基督も怒る」 『決戦漫画輯』 川崎市市民ミュージアム所蔵
- 8) 石川進介「日本に時を藉すな」 『漫画』(12-2 44.2) 日本漫画資料館所蔵
- 9) 宍戸左行「鬼畜の内緒話」 『写真週報』(294 43.10.20) 立命館大学国際平和ミュージアム所蔵
- 10) 池田さぶる「暑さに負けぬ勤報隊」 『決戦漫画輯』 川崎市市民ミュージアム所蔵

図版



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 9



図 8



図 10